

# 自己のいのちを生きるとき

## 河辺 杲



ある年の初冬、知人の案内で神宮外苑を訪れた時、神宮の入口に立てられてある二つの「定」の掲示が目についた。ひとつは櫛のような材で作られた屋根つきの立派な掲示板であり、いまひとつは白いペンキの小さな板で作られた立札といった感じのものであった。内容はいづれも「定」書で、前者には「一、車馬ヲ乗入レルコト。一、魚鳥ヲ捕ルコト。一、竹木ヲ伐ルコト。右境内ニ於テ禁ス 大正九年十一月一日」と記されており、後者にはこの三項目を補足したもの——車を参道や車止区域内に乘入れること。一、魚鳥や昆虫を捕えること。一、竹木を伐ったり折ったり林内に入り、植物木の実を採集すること。——をはじめ動物を連れて入ること、許可

なくのぼり、プラカード等を掲げること。スポーツ競技又は練習すること。許可施設以外に歌舞音曲を行うことなどをはじめとして、その他に物品の販売、営業、募金勧誘宣伝文書の配布。映画及宣伝の撮影。危険物の持ち込み。集会を催すこと。秩序風紀を乱す行為。等一四項目にわたり掲示された。「境内において禁止します」と付記されていた。これには年月日が記されていなかったが内容からみて戦後に書かれたものに違いないと判断できた。大正九年の簡潔にして要を得た三項目の「定」書が約五倍の一四項目になっている二つの掲示から三〇年の時代の変遷を縮少してそこに見る思いがした。また同時に戦前の目に見えない個人や社会の中にあつた

心の枠組が打ちくだかれたり、見失ったことにより、なにか自由になつたような解放感とは逆に何倍もの具体的な外部枠としての定書のようなものが必要になつて来たのだとも思つた。ともかく戦後さらに三〇年近くを経た今日では法律等はもとより身近な生活のルールが細かくなつて来ていることは事実であり、外部枠による生活の規制が目に見えないところで働いていて、そのことにより秩序が保たれて来ているのだろう。しかし反面このような社会の枠組によつて随分細かいことに神経をすりへらして生活していることもたしかだと思ふ。またこれらの外からの規準枠のようなものが自分自身のものとして充分とり入れられなくて攻撃的な感情を高ぶらせたり、これらの社会のルールの裏道を考えるような人間が多く出たりすることによりイライラし易くなつたり、さらに心の深層に押しこんでしまつたためか無関心をきめこんだりして余り外部枠を感じなくなつて来ているのではないかとも考えられる。

もちろん戦前の社会生活の規準枠から解放されても自己をコントロールする力が充分發揮できれば細かな定書のようなものがなくても社会の秩序が保たれたのだとも思ふ。社会の

発展に伴う新しいルールや外部枠による秩序が必要とされることも理解できるが、人間としての真に自己のいのちを生きたるの自覚が見失われてはならないと思ふ。日本人は常になにかの外からの枠組にたよつてのみ自己を律していこうとする傾向が強いようにも思われる。外枠があつてもなくても自己をコントロールできる人間のもつすばらしい力を信頼し、これを育てようとはしない。私は非行少年と呼ばれた青少年たちとの心理治療的人間関係の中で彼らが立ち直つていった体験から、真の自由感を得て自己の生を生きることが自覚されるならばそのことによつて「自然」とでもいいたいような調和の心が覚醒されて結果的には自己コントロールの機能がフルに發揮できるようになると理解して来ている。

ところで幼児たちは生活の大部分を「遊び」を通して自己のいのちを生きつづけている。彼らが遊びに打ち込むときこそ自己の生を生きるということを自覚するときなのである。複雑化する社会の枠に適應するための認識も徐々に一方で必要であると共にまた、それ以前に幼児たちが遊びの中で人間としての真の自己の生を生きる自覚が十分にできるような教育への心くばりが大いに必要だと思ふ。(洗足学園短期大学)